

項目

1. 庵村八丁行 文-1 鈴木邦則
2. 夏の思い出 経-1 中川陽子
3. 夏合宿集結地行幸に参加して
経-2 上田英津子
4. 北への旅立ち 産-3 安達 寛
5. 極私的「山行」への想い
産-2 日沖春次
6. 独白 文-2 北條好子
7. アルバイト体験記 産-3 嶋路良造
8. 下宿訪問記 学-1 杉本克己

以上

廃村ハ丁山行

1回文学部 鈴木邦則

ここは土蔵の中、静かである。聞えてくるのは、沢の音のみ。一本のろうそくの炎に照らし出された丸っの顔。

久しぶりであった。この静寂。大学生活に入、一ヶ月半。講義が終わると即、下宿へ。テープから流れてくる聞きあきた曲。食堂へ行けば決まった定食。真とのとりとめのない雑談。弾いけども弾いけども曲にならないギター。ああ、これがあこがれの大学生活なのか。ただむなしいばかりの毎日。充実感というものの一かけらも感じることがない生活。もう耐えられない。この生活。今の自分。あの都会の雑踏の中で、学園の中で、自分はどのようなのだろう。

自分の故郷は、田舎である。山があり、川がある。自然の中で育った自分。

ハ丁へ来て、今日で二日目。北山の自然が、ワグネルの先輩が。同輩が、自分に考える機会を与えてくれたようだ。今までの大学生活に終止符を打とうと。

明日は、みんな何をやりたい？

「オレは散歩や。」

「私は絵を書きたい。」

さあ、自分は何をせろうか。魚っりでもしょうか。

これがハ丁での四日間。

夏の思い出

経済工 中川 陽子

街の並木も赤に黄色に染まり始めた今、不思議にも過ぎ去った真夏の日々が甦ってくる。パンをとりながら私の心は頼母木から松差岳へと向かっている。飯豊縦走の最後のコースだ。起床午前2時。紺碧の空に白い月。どこからとなく寢息がきこえそう。今までの私なら早く夜が明ければいいのにとと思うはずだが、この日は不思議にも何か私の心に抵抗があった。今日はいよいよ下山だ。7月21日に出発してから早く合宿が終わればいいのにとそればかり考えていた私だけれど、心はまだ山を降りようとはしない。合宿の後半ぐらゐから私の足は大地につき、心に山が宿ったのだなあと思ひ、あの苦しい登りのときの私はまだ山とは離れた自分だなあと思った。視界にあるものは、S.L.さんの靴と今まで多くのワンダラーによってふみしめられた道。私はとてもワンダラーではないけれど、ひとつのパーティの中に加わり、汗を流し、はく息も荒く、ペースが遅くなりおくれてしまうととてもみじめな気持ちになるが、自分も山に登っているのだ、このパーティの一員だと思いと励まされ

水、誇らしげな気持ちになってきたのだ。合宿を終え、今も飯豊の山並みが見えてきそう。とても山の名前などは言えそうもない。しかし、ひとつひとつが私のこの夏の思い出であり、宝物だ。

夏合宿集結地行事に参加して

経済2 上田英津子

「八月の一日か二日ぐらいに好きな時に現地入りしたらいいわ。」と現地のP.L.の佐合さんに言われて、思わず「え、わたしひとりで行くんですか、長野まで。」と本までひとりで行ったこと。最高は、大阪の天王寺あたりまでだったからです。それでも何とか着きました。戸隠イスタンキャンプ場には、二日の夕方でした。それから生糸を初めてテント生活が始まりました。キャンプ生活も初めてなら、山にもなじみが薄く、わたしは本で比叡山に自分の足で登ったことなく、私の山に閉じる履歴書もごくあったものですね。

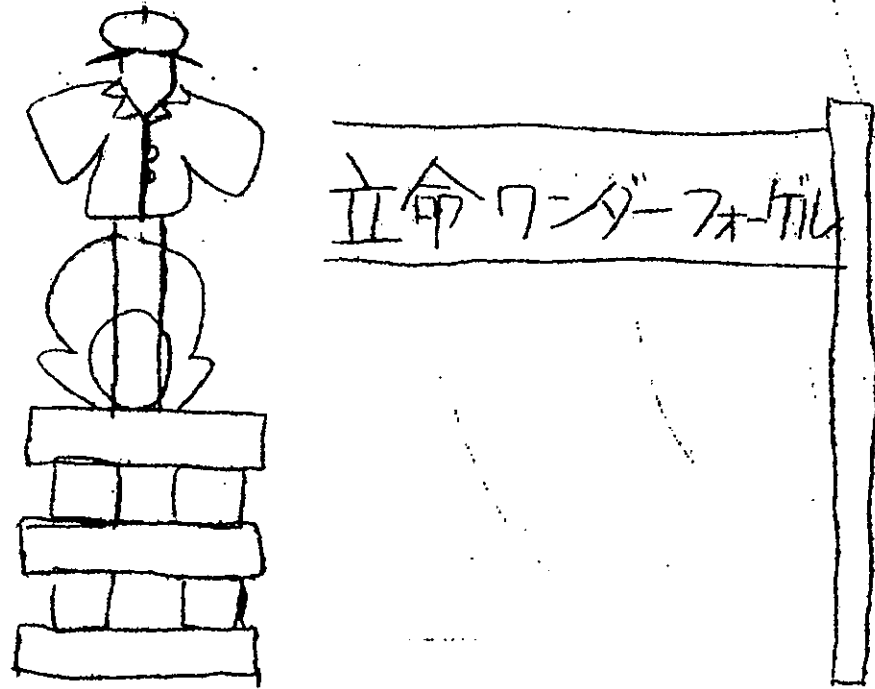
その一、小六の夏休み学校から行った伊吹山。小学生のことなので昼間で、七、八人の班を中心に登りました。しんどかったお茶をたくさん飲むとある。私たちは、班の男の子にあんまり飲んだらあかんと注意されたり、励まされたりして登りました。頂上の涼しいこと、黄色やピンクのお花畑、足の下の方にある不思議な色をした雲ほど感心することばかりでした。

その二は、高校の修学旅行で行った九州の又

住山です。修学旅行に山歩きに入れたのは、昼間十分疲れさせ、夜はおとなしく寝てもらおうという先生の作戦だと思えます。とにかく十一月初めの又住山は、岩と枯れ草色に芝生みだいたのほかりでした。なぜか木はなかったようです。日がよく照って、あたりは一層暖色にしてみました。向こうから来たひとりのおじいさんが、私たちに二人にちほど挨拶してくれらるのです。そういうのに慣れたいな私達はうれしかったです。途中でやけりしすぎて時間がなくなって、山頂まで行かずに引き返したのが残念でした。そのほかの山というと、木更山とか天王山とかで、最初から高くないしレベルが一層低くなってきます。そんな私は、なぜワシントンに入ったかという質問を何回も受けました。自分でもよくわからないけれど、体育会をやめる時から何か軽い運動をと思っていったこと、級友の無責任(?)な奮力の、経馬舎は乏しいけれど山に対する比較的いい印象、これらが結びついていたようです。

その二、テントははいてみて、その狭さと地面がいかんぞいさるのぞあーあという感じがしました。二日の晩はさすがに何かはか眠れませんでした。それでも早く眠らなくともと焦る気持ちはあまりなく、

降り出した雨がテントに落ちるのを聞いていました。翌朝のおかずはエボカン。スプーンで食べるんですね。ただ、ただ感心しました。この日は一日中雨だったので、四回生に4コマボクシングや歌を教えてもらいました。この時は罰はなかったのですが、4日の夜飲ミーティングでは一番の犠牲者でした。また、歌はたくさんあってそれらがゴチャゴチャになつて、わたしはなかなか覚えられませんが、四回生の歌を聞いてお世辞めぞ男声合唱団みたいだなと思いました。こうして三日は過王、この日はすぐに眠ったおうです。そして四日の集結地行事、恐怖のスタンツに至るのであります……。集結地行事は予想以上に大がかりなものでした。人数の多さがまとまりのない工機とに表われるのではなく、盛り上げるかたになっているな、とそんな気がしました。



はやく四回生
になりたい……

木村 C.L の 吐き

北への旅立ち

産業社会学部 3回

安達 覚

札幌にて ...

早朝、札幌に着く。曇一つない天気であるが、風がひんやりしていて京都の暑さにくらべてずいぶん涼しい。北大の寮に泊る予定であったが、北大応援団が合宿で7月中、貸し切っている為、交響楽団の建物の筋にある空地に許可を得てサテする。ホッポラ並木が繁りクラフ博士の銅像の前で観覧行客が記念撮影している。構内は、山盛りと書いていた。

網走にて ...

2日間の分散の後、皆が汗をたらたら流しながら網走駅に集まって来た。ユニホームとして一緒に買ったTシャツは黒く汚れていた。駅前にいたオジサンの好意により、彼の経営している天都山頂上にあるランブ牧場にサテする。牛や馬が放牧されており、展望台に登ると網走湖、能取湖、オホツツノ海が見えるはずであったが、あいにく曇っていたので眺めは良くなかった。網走という網走刑務所を遠想するように囚人達で網走の街は一パイであろうと思っていたが、全然彼らを見なかった。私もこへ入るかも ...

羅白にて ...

『アフリカの光』という映画を観た。ヨーゲンと田中耕衛が羅白から出ていくまぐろ船に乗ってアフリカへ行くという物語だった。

そこに描かれている自然は、荒涼としていて、容易に人を寄せつけようとはしない厳しさがあった。しかし、私達の通り過ぎた羅白は、さび迫った山々とキラキラ光り輝く海だけだった。夏と冬の違い。夏はかりそめの姿。冬こそ本当の姿 ...

『お前達は、かりそめの姿を見ているだけさ ...。おれ達は、厳しい冬のさなかに連船の恐怖と戦いながら魚をするのだから ...』と風景は無言でかたっているみたいであった。

屈斜路湖にて ...

2回目の分散、約10キロの道を歩く。原生林が繁り、高速道路路なみの信号の無い一直線に続いている道。サイクリングのエイちゃんか手を振ってくれる。車に乗ったアンちゃんかクラクションを鳴らして励ましてくれる。バスで行くと10分のところを歩いてゆくと1時間かかる。つくづく北海道の広さを感じる。北海道は今年最高の暑さ37° ... 3人のパーティであるが、トップとの差が300mひらきまいた。私がおくれました。

オネトにて ...

看護学生17人がキャンプしていた。彼女達の清らかな歌声が聞こえてくる。こちらは3人で、歌っていても圧倒されっぱなしなので静かに眠る。摩周湖や阿寒湖に比べて観覧行客が少なくトテモヨク。湖の色が刻々と変わり、美しさのためにこのような所で暮らしていたら、何も考えずに生きてゆくのではないだろうか ...

帯広にて...

5日間の分散の後、集結。暑さの為に頭をやられる。パーティーの雰囲気も少し悪くなる。カニの家に泊る。記者が私達の雄姿を写してくれた。翌日新聞を買い込んで調べてみるが、みあたらない。誰か私達の写っている雑誌をみつけたら例会の時に持ってきて下さい。

列車にて...

北海道は女の子がたくさん旅している。彼女達はほとんどがユースホステルに泊るために汽車の中でくっついて話をする機会が無い。ロマンスが生まれそうで、生まれ無い。新人の1人を除いて...

感想...

北海道は我会にとってまだ未知の部分であり、今回は全面的に山が禁断されたが、利尻山や礼文岳は熊も生息していないで、夏には大雪山や羅臼岳にも、多くの人が入っており、早くから研究にかけば充分、山も登可能であろう。

◎ 好評にお答えいたしまして、再び売ります。買います。もらいます。コ〜ナ〜。を設けたのですが、残念ながら、今回は申し込みが少なかったため、次回に多数の申し込みを期待しております。尚詳しくは図書編集のブロック委員へ連絡してください。(特に、女回生よろしく!)



売りますヨ。

ラニチコート

色:キヤメル

サイズ: JAN BOYSのM
にしては大きい

値段: 気持ち程度の4000円

詳しくは、上田英洋子へ

同じく

売ります

中川陽子

いくらでも箱ころです。なるべくハフサムBOYを希望。

片野泰子

買い手は年齢容姿不問がなるべくなら、郷ひろみ風を望む。値段は気持ちで箱ころです。

「エッセイ」

極私的「山行」への想い 装備B、日沖春次

一つの山行があると、それまでに肉体的あるいは精神的に最上の状態に持っていくことは、山を志す者として当然だと思っています。

僕の場合、山行後が問題です。いつも帰りのバスあるいは電車の中で、帰ったらあれをして、これをしてと考えるのであるが、実際、数日間、食べる事と寝る事以外、考えてみると何もしていないことが多い。たとえ、装備の整理と山行の総括を完了しても、まだ、しっくりこない日々が続くことさえある。つまり、一つの山行が終ったと気づく様になるまで、かなりの時間を必要とするのである。最近、それは、その山に魅せられ、その山に酔っている時もあるのかと考へたりしている。(とだけ僕が僕が僕がこの言葉に反映されているか疑問だけれど)

いつか旧人となり P.W 合宿などが連続している場合には、僕はそんなセンチな時間など許さないと、思うし、又、それぐらい我々としての認識は持っているつもりだ。ただ、言えることは、その時の自分自身の意識の問題として、少しなりともその時を得ずして、おたく平気で次の山行にのぞみたくないということである。

もし、そんな調子で山行にのぞむならば、自分にとってもう山は、現実社会からの逃げ場所あるいは自らの悲しみ、欲求不満、怒りの捨て場所になってしまいかも知らない。

つまり、それは、僕の「山行」の動機ではないと思うし、もし、そんな時が来たとしたら、その時こそ、僕の「山行」の終りだと信ずるからである。

1976. 6. 25. P.M. 11:36

追記:

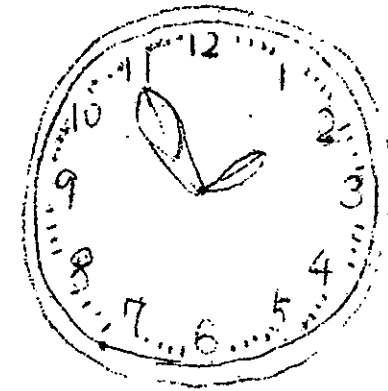
山に居る時は、こんな事正直な話、考えないから不思議です。夏合宿まであと1ヶ月足らずの今日頃々、酒と女に食き始め、そろそろ山に食うている自分を知る。

下宿にて、1976. 6. 26. A.M. 1:00

装備BのJ. ディーン

え、J. ディーンって、どんな人?

トルミちゃんが、目を丸くして、ついにどうかな、ちゃったようですよ。J. ディーン氏さん!



見方の時刻 1:55 P.M. でき。

ワンダーフォーゲル会入部の動機をメインテーマとしてペンを進めてい
か好むならぬのであるが、すべての事物の前には必ずその意味すばしを必
要としている事を考える時、又、対の輪郭は明確なものであるが、自らに
つぎ進んでいくとそこは渾沌に於て支配される事を認識している
場合、これらの意味すばしは、私に当然以外の何物も与えない。

何故なら、本会の印象から認識に至る行程、カメテアとなるもの、山
の概念であると思はれるが、私にとって「山」という概念は、若葉
のつややかな緑、底まで透きとおって見える、川と水の冷たさと草の匂
いとかいったような感覚でとらえた事物の抽象化でしかなかったから
である。

以下記すことから私が何をいれんとしているかを断片でも、読み取
っていただければ幸いである。

その頃、私は人間というものがこういうものか、うしろで感ずいてきた時は
胸の底に虚無感にさいなまれていた。私には、文壇学流のティオネスの
シニカルな行動でさえ何か相容れることが出来ると思っていたのである。
彼はアキネの町を、昼であるにもかかわらずランポを片手に歩いている新を
人に見送られ、彼はおもむろに答えたものである。「人を捜しているんだ
と。私にとっての虚無感、精神の自由化と建て前と本音の分離とい
った観点から直視せねばならぬと考へたし、そして、考へ続け
ている。ここで述べる「自由」というものは、自分が勝手に使ったも
い時間か、小だんにあるとか、しばしば無秩序とイコール関係になるよう
な物理的な意味を有するのではなく、精神的な意味ありを有する。
すなわち、自己を構成する諸々の分子を取り去った魂というべきもの
が積極的なものに帰しているかどうかという事である。

自己を構成する諸々の分子と記したが、某作家の言葉を借りれば
「渾沌とそれからわけのわからぬ反撥とだけがある。あるいは自尊心
だけ、と言っただいかなも知らぬ。しかも細くとまじりまじられた自尊心で
ある」となるかも知れぬ。

私にとっての精神の自由化は畢竟、魂の泥沼作業に他ならない。
束縛されて手も足も出ない狭い生活範囲から何かを求めた積極的
迷走を試みようとしても、結局、消極的迷走に帰着する。すなわち
観念という範囲内でしか自由にはなれないのである。自己を束縛する
ものは何か。解答はまだ一つあるのみ。自分自身に他ならないので

ある。上記の事と共に、人間の魂は永遠に孤独であるという事を我々
は認識しなければならぬ。

私にとってこれらの事がわかるまでに、否、それまで抱いていたものが
永遠の夢にすぎないことがわかるまでに、少なくとも二百冊の本
を讀破せねばならなかった。そして、二百冊目あたりを讀むころにはそ
れが完全に崩壊する。本を讀む場合、常に自分の考へが齧つてはい
ないかと、鉛筆を持ちながら讀み進んでいったものがあるが、これは
悲しい習慣であると思う。讀者はすべからず楽しみの方のものであるの
が最上である。モームは「よみこたえのある探偵小説」16冊とそれに
湯たんぽの同意文をすれば、どんな典性の翼かぜにかかても私たちが
鼻かぜくらゐ何だといって、平然として居る事が出来てあろうかと
読書案内で述べている。術学的讀書ほど無意味なものはないと私は
考へる。人間、魂は永遠に孤独であると記したが、我々の魂が
身売するか、救済するかは、各自の精神の領域の問題であると思う。自
己のこの領域だけは人に犯されたくないという何かを求めていたければ
本界において、存続的にならざるを得ないのではないかと、直に生きたか
出来たか、はなないか、そして、自己の領域というものは、一つのドク
シメントを有することによって構成されると私は考へる。以前、私は痛切に思
ったものである。「狂気とそれでもって自己を現する何かが必要」とい
うことで、それを「アキネを聴く」という形で表わされた。ニュー
オリズズの巨人の一人である、このニュー・アキネは言った。「私は自分の生活と演奏するのだ」と
私に、私がアキネが好きなのは、手としてこの点、ゆえである。又、ルン
ムストロンの次の言葉は、すべてに通じる何かがあると思う。彼は言
う「ラッパを手にすると、世界は私とついてくる。私はラッパ以外のもの
に氣を使わぬ。ラッパについての私の考へ方は、昔、ニューオリズズで演奏
していた時と変わらぬ。それは私の生活であり、人生のすべてだ。私は音を
愛する。だから、正しく吹こうと努めたのであり、夕度と結婚したのである。
妻となった女性達は、まのうちにラッパと人生とは思わななかつた。だが、
主婦喧嘩も、自分のショウを輝かすだけにはならなかつた。夕度
逃げた時でも、ラッパはちゃんと吹けた。私はラッパで自分自身を話して
きた。私はラッパを愛し、ラッパは私に恋をした。私達は人生を演奏する
お笑いのためだろうと、ショウマンショウのためだろうと、裏庭でやる練習
のためだろうと、かまぬ。生まれくるのは、すべて本物のためだ。
高貴の人にも、下層階級にも、本物の演奏をすれば、私は幸福だ。ドイツ
の聴衆は、柄のついたオペラグラスをもち、しげしげと覗きこむ。

だが、言葉がけになると、グラスは、持ちほり出して、スイングしちまうんだ。
と。私は、この言葉は、偉人といわれる人たちの、産物の集いからする、綺麗な文句より感動を与える。「スイング」こそがすべてであると私は考える。これは、ジャズの領域のみならず、すべてに通じる事である。そして、現在私が最も望んでいることであり、真剣になって追いつけようとしなければならぬことでもある。又、これは、先に述べた、おっさんの自由化という事と重要な密接があると思う。そして、これこそが、将来の生活の指針となるべく、学生生活の間に、人との対話の内に、あらゆる活動の内に見い出さねばならぬものであると考える。

以上、私が述べてきた事は、ワニゲル会入部動機とある意味では直接的には記さなかったが、行間から読み取る事ができると思うし、何れも、私はこの文を書くに際して、自己主張のいい機会だと考え、ペンを進めてきた。
(おわり)

“アルバイト体験記”

図書編集・衣笠の三回生

京都にディスプレイの会社は数多くあるが、その中でも“ゼニヤ”は、~~フニヤ~~フニヤ、アニマなどと並んで、筆頭格に位置するディスプレイなどと聞く人は、現代的感覚をもったスマートで、きらびやかな仕事だと思っただろうが、それは一部の頭脳陣の仕事で、何をかくさうアルバイトなどは、畳や床机、バックパックなどを運んだりする裏方の重労働である。“ゼニヤ”は人使いの荒いでも定評があり、それこそワニゲルの先輩よりも恐い悪連隊が何かのまうな、おっさん連中が待ちかまえていて、やって来たアルバイト学生をぼろくそにののしり、こま使うのである。そして我々はプロレタリアはしかたがなく、それに従い、重い畳や床机などをホコリまみれになりながら汗だくで、必死になって、あっちへ、こっちへと運ぶのである。全くロマンもクソもなかったものである。⇒

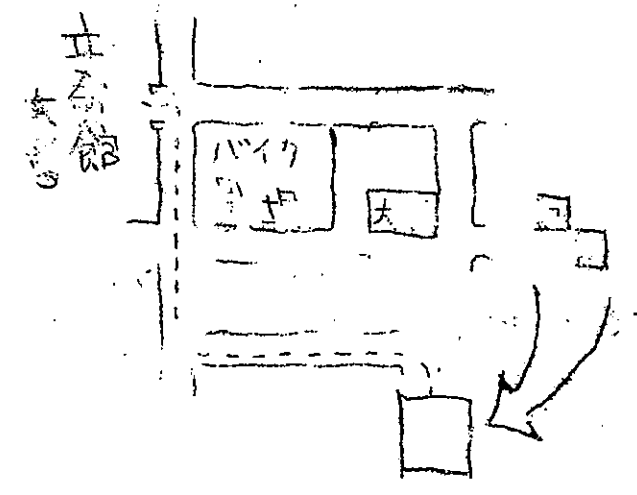
もっとも、このおっさん連中、ガウが悪いのも昔り前で、4、5人の正社員を除いては、人に困った会社側が円山公園や鴨川の橋の下で寝ている浮浪者をつかまえてきては、日雇いとして雇うのである。衣笠では他のアルバイトはなくとも、この“ゼニヤ”だけは必ずあるというほど、衣笠と“ゼニヤ”の信頼関係は厚く、まだ学生も日雇いの気安さ、手軽さから希望者も多い。なかには“ゼニヤ”の鬼、ゼニヤマン、ゼニヤキラー、と呼ばれるような常連も少なくない。何夜も行っていると、お互いに顔を覚えてしまう。“ゼニヤの恋人”を自称するIS3回生の某氏や、こういう私などとはその一人で一諾に働いたことも何度かあり、ワニゲルの他のメンバーが喫茶店などといつて談笑している昼下りなども、我々は、明日“ゼニヤ”行かへんけ、などといつて並んだりしている。常連の幸にも、2人3人“ゼニヤ一筋”という神様の存在がいて、彼らは、おっさんからの信頼は厚く、とまどき仕事を手かまされたりして、おっさんよろしくあごで指示して我々をこまつかうのである。このようなアルバイトには会社からスカウトされるという人もいるという話である。残念ながら某氏や私などは、まだこまつかうに到っておらず、その道は長く苦しいであろう。

P.S. 既に労働はまついか、慣れればもうどうもないので、一度来られることをお勧めする。ひょっとしたら某氏や私に会えるかもしれない。

図書係員
杉本克己

下宿訪問記 第一弾は 経済学部3回生
 "チッキョー"の高橋さんです。先日、我々の井手
 君とおしゃしました。そのフェイスに幼い頃のガキ
 大将の面影を残している高橋さんの下宿は衣笠校
 舎から、ゆ〜くりと歩いて5分のところにあります。
 街路のような階建ての建物の2階4号室が高橋
 さんの部屋でした。扉を開けた瞬間、女性ならさす
 目をさすか、あつぱかえるかするでしょう。(下宿生活
 に慣れた井手君の評下では、中の下々といふところ...?)
 狭い部屋(実質4帖程)の中に机(使い古?)本箱、その他
 各種のガラクタなど、所狭しと並べあり(上品な生活
 に慣れた僕らには、三屋サリと書かれたほど、
 5分も入れればパンクするでしょう。さて、机の上には
 教科書その他本はいっさい無く、ゴミのようなガラクタ
 が散乱していました。本箱はといえば、上の方には教科書
 文庫本など知的な教養ある本がぎっしり...
 けれど、下の方に目を移すと... あや、週間紙(説明は
 不詳ですが)、エキバチツクなカラー写真いっはの
 雑誌などが詰めこまれていました。さらに本箱から目を
 移すと、その横には何やら意味ありげな折り紙が

2つほど詰めこまれておりました。また、押入れの
 下には、何日分かたまっている洗たく物がバケツに
 一杯、さうど一番上にパンツがありました。
 読んでいただけでワッ!! キッリナ〜と思うでしょう。高橋さん
 によれば、同じ3回生の加藤さんと争うほどだそうです。
 その場で高橋さん、友人の方と将棋を打っていたのは、
 やがて勝負がつくと、僕達の様子を見て何事か感じたのか
 (5分外出しやがて帰ると)何〜と、お菓子を買って
 来て下エテのこいた。(安い物でたか)その上、紅茶まで
 こきろくにこいた。まさに感激!本当にありがとう
 ございました。(これほどのことを次回の森さんに望んで
 ほしい...?) こうして僕達は、実に気分良く帰るこがで
 きました。高橋さんの下宿は少々狭く、性格を反映してか
 多量にゴミがたまっています。サービス満点、明るく、いっ
 ぱりお洒落な感じ。実にくっつきやすい所だと思えました。
 (女性はあまり近づかないか...?)



編集後記

○今回は、雄雄ごとの嶋路こと、嶋路さんがいはいりませんので、そして森さんも講義で僕ら、2回生(波久片野(別名、ルミちゃん)と1回生(玄米、葛原、中川、平山、井手)をして、今回始めてヤンシーをつくる2回生の上田の8人で作っています。思うように原稿が集まりません、自分から進んで投稿して下さい。(佐野、波戸)

○今の時間(10日土曜日の午後)にヤンシーを刊するのは若干気がとかめたのですが、あいにく、彼女 紙氏の心配をする者も居らず印刷の事はひととなりました。広く会員の者に原稿を求めたのですが、毎度のことと内輪の者が中心になってしまったようです。次回のヤンシーはもっと充実したものにしようと常に思いながらも、次第も自共つ折は、おおめに御承下さい。(片野泰子)

○きょうは、とてもいい天気です、なのにこの活ない法・学生センターで主に単純労働をやっています。もうすぐできます。(上田英津子)

○昨日の朝は酒沃にいたのに今の僕はもう都会の雑踏に吞まれているんです。PMVもうっ、図書編は鬼か! ワシヤ今日はゆっくりしたいんじや。はま下宿へ帰って老たしたいナP (法1回 葛原康生)

○巨人軍V1! となぬでしょう。やっぱり、巨人が勝たなから、おもしろくないんなあ。よくやった長島よ! (6J-T. HIRAYAMA)

○秋晴れの土曜日の午後、OXさんと御所の三洲道を恥ぢらひながら散歩する予定もこわれ、鬼の波戸氏と片野女史にこまつかれています。経済1回 中川陽子

○出掛けにバスの中で定期入れを落としてしまいました。既がついてあわててバスを追いかけたのですが見つからず終い。もうくたくた。今日は、いやな日です。下宿訪問記には、X9X9に書きました。高橋さんすみません (Business 1. Sugimoto)

○最近おなかが出てきました。悲しいことです。

トニ平
此 上野茂 馬目町38 075-701-4880~1
誠安女子短期大学 上野茂寮
24

307 柳真知子